北海道高体連登山専門部 65 周年

創設から令和の現在、そして未来への希望

北海道山岳スポーツクライミング連盟名誉会長　小野　倫夫

・はじめに：65 周年への祝福と全体の歩み

北海道高体連登山専門部創設 65 周年、心よりお祝い申し上げます。昭和 36 年の設立以来、数多くの先生方と生徒たちが北海道の雄大な自然の中で安全登山の実践と成長を重ねてきました。その歩みは、北海道の登山文化を支える礎として、今も脈々と受け継がれています。本稿では、時代ごと・テーマごとに北海道高体連登山部の歴史を振り返り、未来への展望と提言をまとめます。

・創設期：登山専門部設立の経緯と速水潔先生の尽力

登山専門部が北海道高等学校体育連盟に設立されたのは昭和 36 年。端緒を開いたのは旭川山岳会・速水潔先生です。当時、全国的に山岳遭難事故が多発し、北海道でも高校生を含む事故が相次いでいました。速水先生は旭川東高校山岳部顧問として「安全登山教育の必要性」を強く訴え、道岳連理事長としても道内の高校山岳部顧問に呼びかけ、道教委との調整を重ねました。幾多の困難を乗り越え、専門部設立に漕ぎつけたその情熱と行動力は、北海道登山教育の原点といえるでしょう。翌年には第 1 回北海道高等学校登山大会も開催され、登山部活動の基礎が築かれました。

・昭和期：初期大会運営と躍進、顧問・生徒たちの物語

昭和期は、登山部活動の草創期から成長期へと移り変わりました。創設初期は「道高体連 30 年誌」にも記録されていますが、当時は全国大会と道岳連が一体となって活動していた時代でした。昭和 41 年に高校教員となり山岳部を立ち上げた筆者も、教頭の助言で高体連に加盟。初めて参加した昭和 45 年第 9 回横津・駒ヶ岳大会では、準備や計画の大切さを痛感し、生徒と共に天気図や読図、救急法、炊飯、マナー、チームワークなどを学びました。昭和期の全国大会では、標茶、函有斗、芽室、函白百合、旭川東栄など、道内各校が上位入賞を果たし、特に昭和 48 年の函有斗（1 位）は印象的な快挙でした。顧問の先生方は、登山技術だけでなく生徒の人間的成長を支える指導者として、数々の感動的なエピソードを残しています。

・平成期：競技化の進展と印象的な大会・顧問の功績

平成に入り、登山部活動は一層の競技化が進みました。昭和 62 年（1987 年）には初めて北海道でインターハイが開催され、筆者も A 隊男子隊長として参加。全国から集まった選手たちと道内生徒のレベル差を痛感しつつ、審査基準の公平性・客観性の確立を目指

した運営が印象的でした。特に女子旭川東栄高校が 3 位に輝き、池永先生の指導が大きく評価されました。平成以降は道岳連に所属、全日本登山大会にも関わり、全国 8 ブロック輪番開催の中で北海道が主管として交流登山会を行うなど、全国の仲間と深い絆を築きました。また、平成 20 年以降、国体登山競技が種目変更となり縦走、踏査からクライミングへ移行し、高校生のスポーツクライミング選抜選手権大会が新たな伝統となっています。冬山登山は完全には禁止されていませんが、栃木県での事故以降、より厳格な安全管理が求められるようになりました。

・令和期：コロナ禍の影響と全国大会再開催、近年の成果と課題

令和期は新型コロナウイルス感染症による活動制限が大きな課題となりました。平成 32 年には登山大会が中止となり一時的に登山活動が停滞しましたが、令和 5 年には 36 年ぶり 2 度目となる全国大会が北海道で開催されました。前回大会の経験者やニセコ・羊蹄山で苦労を共にした先生方との再会は、筆者にとって人生の大きなメモリアルとなりました。大会運営は専門部や加盟顧問、OB の協力で見事に行われ、準備・リハーサルも周到でした。大会成績は旭東 12 位、旭北 27 位、女子 12 位と振るわなかったものの、翌令和 6 年には旭東男子 1 位・女子 2 位という歴史的快挙を達成。函有斗、標茶、芽室、函白百合、小樽工業など過去の名門校の成績に肩を並べる成果であり、速水先生もきっと喜ばれていることでしょう。

・今後への展望：加盟校減少への対応策と安全登山教育、地域連携強化への提言

現在、少子高齢化や廃校、新型コロナウイルス感染症、熊の出没など自然リスクの増加により、加盟校はかつて 70 校を超えていたのが 25 校にまで減少しています。これは高体連登山活動にとって大きな課題です。しかし、アウトドアスポーツの多様化や社会の変化を前向きに捉え、次のような対応策を提言します。

- 安全登山教育のさらなる充実：最新の救急法やリスク管理、冬山登山技術などを体系的に学ぶ機会を拡充し、地域の山岳会や専門家との連携も強化する。
- 加盟校減少への対応：小規模校や合同チームの参加を促し、オンライン講座や地域合同練習会など新しい活動形態を導入する。
- 地域社会との連携強化：地元自治体や企業、観光協会と連携し、登山イベントや環境保全活動を通じて地域活性化にも貢献する。
- 生徒の成長支援：登山活動を通じて得られる「計画力」「チームワーク」「挑戦する力」を、地域社会や将来のキャリア形成にも活かす教育プログラムを開発する。

厳しい状況だからこそ、高体連登山部の原点に立ち返り、安全登山を地道に実践し続けることが大切です。北海道の雄大な自然、登山を愛する仲間たちとともに、雲外蒼天の未来へと歩みを進めましょう。これからの高体連登山部の活躍と発展を心より願っています。

【発刊に寄せて】

【北海道高体連登山専門部前専門委員長　滝川工業高等学校教頭　小池　圭太】

令和６年のあるとき、北海道山岳クライミング連盟名誉会長の小野倫夫先生（元札幌新陽高校山岳部顧問）から、私の元に北海道高体連登山専門部３０周年記念誌が送られてきました。私は、その記念誌を読むまで、その存在を知りませんでした。そこには、昭和３６年（1961年）に登山専門部が高体連総会で承認されたこと。また承認されるまでの関係者の熱意と苦労について。昭和３７年の第１回全道高等学校登山大会から平成９年の第３６回大会までの記録。そして、昭和６２年に開催された、北海道インターハイ（ニセコ連峰・羊蹄山）について。また、各支部における約３０年の記録などが記されていました。３０周年記念誌の作成から約３０年が経ち、また令和５年には３６年ぶりに北海道でインターハイが行われたことを受けて、この６５周年記念誌を作成することにしました。

令和５年の北海道インターハイの話を中心に、私が登山専門部に係わった数年間を振り返りたいと思います。最初に北海道インターハイの話を聞いたのが、平成３０年の専門委員会だったと思います。昭和６２年の北海道インターハイは、ニセコ連峰・羊蹄山にて大会が行われました。次の北海道インターハイは大雪山を舞台に行いたいという、ぼんやりした案があったように思います。そんな中、大雪山に近い高体連旭川支部から、私と当時旭川北高校山岳部顧問の細野護先生の２人で、令和元年の宮崎インターハイを視察することになりました。初めてインターハイを視察して、北海道の登山大会との違いに驚きました。特に驚いたのが「チーム行動」でした。選手４人が協力して登山する姿は、とても刺激的でした。また、読図もＰ旗の位置を読み取り、地図上に記録するものでした。高校生が地図を読みながら生き生きと登山する姿は、登山大会の趣旨に合致していると思ったものです。ちなみに当時の北海道大会は、いわゆる隊行動のみでした。また、読図も隊長が行動テストと一緒に課していました。その他も細かい点で、全国大会と北海道大会の違いを知り、全国大会の良いところを北海道大会に取り入れていこうと思いました。またそれは、北海道でインターハイを実施するにあたり、全国大会と全道大会の審査方法などの違いを可能なかぎり少なくし、スムーズに全国大会を運営したいという思いもあったと思います。ただ、全道大会の良いところは残したいとも思いました。例えば、隊長が出題する「行動テスト」などです。全道大会は隊長の権限が大きいと思います。でも、このスタイルは残したいと思いました。普段の登山においても、リーダーの責任は大きいです。大事なことだと感じています。また、全道大会では隊長は一番前を歩きます。しかし、全国大会では隊長は一番後ろを歩くことに驚きました。考え方や文化の違いだなと感じたものです。

宮崎インターハイの視察を終えた令和元年度の冬に、新型コロナウイルスが猛威を振るいました。いろいろな教育活動が制限されて、臨時休校も続きました。結果、令和２年の全道大会（札幌岳・目国内岳）、そして群馬インターハイ（上州武尊）は中止になりました。部活動も大きく制限されて、テント泊や炊事も難しい状況になりました。令和３年の福井インターハイは、日程短縮やテント泊無し、炊事無しの状況で何とか実施されました。令和４年の香川インターハイもテント泊無しの大会でした。この約３年間で、高校山岳部の大事な登山技術や文化が失われてしまいました。コロナ禍が収束すると、１年生から３年生までの全部員を相手に、顧問が登山の事をイチから教える厳しい状況となりました。しかし、あれから数年経ちようやく高校山岳部の活動も元に戻ってきたように感じます。

令和３年、４年、５年の全道大会はインターハイのプレ大会と位置づけました。令和３年は旭川北高校が当番学校で、十勝岳連峰を舞台にインターハイを想定しての全道大会となりました。令和４年は当時私の勤務校の旭川工業高校が当番学校でした。インターハイと同様に黒岳から北鎮岳、ロープウェイ姿見駅までの大雪山縦走コースにしました。幕営地は、初めて東川町民グラウンドを使用し、ほぼインターハイと同様の大会にしました。私自身が大会運営に深く関わったこともあり、いよいよ北海道インターハイが始まったと実感した記憶があります。令和４年の秋には、第１回の全道選抜登山大会が始まりました。この大会も、北海道インターハイに向けての準備大会で、選手も役員も顔を付き合わせながら、北海道インターハイをイメージしました。この全道選抜登山大会は、北海道インターハイが終わった令和５年の秋に第２回大会を芦別岳にて実施しました。第１回大会は、

北海道インターハイの準備大会だったため、インターハイ後の第２回大会を実施するかどうか悩みました。当時私は専門委員長でした。前専門委員長の細野護先生ともだいぶ議論しながら、第２回以降の全道選抜大会の在り方を考えました。当時考えた大会趣旨は大きく２つです。１つは、加盟校数が３０校を下回り、地区大会を実施できない支部が複数でている中、選手の登山技術向上のために実施する。２つ目は、顧問の人数も減少し、登山大会運営そのものが厳しくなってきていることから、全道選抜大会を開催することによって、顧問間の交流と、登山技術向上を図ることです。顧問は、全員が役員として審査などに当たりました。また、幕営地の「太陽の里」は体育館なども無いので、キャンプ場の屋外で敷板を使ってペーパーテストや天気図審査を行いました。令和６年の第３回大会は美瑛岳。令和７年は室蘭岳で第４回大会が実施されました。加盟校数が減少する中、北海道の顧問、役員の全員が協力して大会運営を行っていく時代になってきたと思います。全道大会が、選抜大会と高体連の２回実施されることの意義は大きいと思います。今後も、この全道選抜登山大会が続いていくことを願います。

無事実施された令和５年の北海道インターハイの詳細については、別に報告されると思いますので、ここでは割愛しますが、内海健一登山隊長（元旭川北高校山岳部顧問）と細野護総務委員長のリーダーシップの元、大雪山を縦走するという素晴らしいコースのインターハイになりました。

【北海道インターハイで教え子の自衛官と】

選手と関係者で６００人以上が参加するインターハイにおいて、難しいのがコース選びです。北海道インターハイは、「いい山を登らせてあげたい」という強い思いがありました。このコースの実現には、内海登山隊長と細野総務委員長の大変な苦労があったと思います。エスケープも無く、気象条件の厳しい大雪山で大会が実施できたことは、北海道の山岳部顧問として、とても誇らしく感じました。インターハイで私はコース隊長として大会に参加しました。大雪山縦走コースの当日、黒岳の山頂から全国の高校生がチーム行動でスタートしていく姿を見たときは、本当に感動の瞬間でした。多くの関係者のみなさんの協力のおかげだと思います。この北海道インターハイでは、北海道代表の旭川東高校男子が１２位、旭川東高校女子も１２位でした。内容的にはとても健闘しましたが、小さいミスが響いた悔しい結果でした。選手達が一番悔しかったと思います。しかし、翌令和６年の福岡インターハイ（英彦山）では、北海道代表の同じく旭川東高校男子が優勝、旭川東高校女子が準優勝という快挙を成し遂げました。私は審査委員として参加していましたが、旭川東高校はほとんど減点の無いほぼ完璧な内容でした。閉会式での選手達と飯田一三先生（旭川東高校山岳部顧問）の喜ぶ姿を見て、北海道の高校登山が評価された瞬間だと思い、嬉しかったです。大会終了後、すぐに小野倫夫先生に電話しました。電話先での喜びの声は今でも忘れられません。

【沢登り研修（コビキ沢）】

【山スキー研修（沖里河山）】

この北海道インターハイにおいて、山岳部顧問以外の多くの役員の方にご協力いただきました。インターハイで生まれた山仲間としてのつながりは、是非今後も大事にしたいです。令和６年度には、夏と冬の２回、登山指導者講習会を実施しました。夏はコビキ沢を中心とした沢登り研修を行い、冬は沖里河山で山スキー研修と屋内クライミング（ネイパル深川）の研修を行いました。山岳部顧問だけでなく、インターハイ等でお手伝いいただいた方々にも参加してもらいました。このような、指導者の登山研修会は、とても大事だと感じています。令和７年度も室蘭を中心に指導者研修会が実施されています。ＪＭＳＣＡの予算の関係もありますが、このような研修会はとても重要であり、今後も継続していって欲しいです。

【厳冬期の美瑛富士を目指して】

登山競技については、いろいろな考え方や意見があります。そもそも登山は競い合うものでは無いかもしれません。私も登山大会の審査などをしていると、そう感じることも多々あります。しかし、競技として競い合うからこそ向上する登山技術もあります。また、そこでの交流によって、安全登山に係わる技術の共有にもつながると思います。そして、各地から高校山岳部の選手達が集まり、楽しそうに登山する姿や、一緒に炊事、幕営などする姿を見ていると、何故かとても嬉しい気持ちになります。これが世代を超えた山仲間としての心情でしょうか。登山大会の運営に、たくさん係わってきましたが、登山大会は参加する役員や顧問の登山技術の向上にも大きく寄与してきました。私自身も、山岳部の顧問になり、登山大会に生徒を引率するようになってから、先輩顧問の先生から多くのことを学びました。顧問同士で山に行く機会も増えて、登山の幅が広がりました。沢登りやクライミングなども山岳部の先生方から教わりました。冬山登山や山スキーも同様です。昨今は部活動指導の在り方や、働き方改革などの動きもあり、部の活動や維持が難しい時代になってきています。しかし、形は変わったとしても、高校生の登山大会が、末永く続き、高校生も大人も、登山を通して成長し合える環境が続いていくことを願います。

最後に、今回中心になってこの記念誌の編集を行っていただいた、細野護先生と記念誌の執筆にご協力いただいたすべての方に感謝を申し上げて、発刊のあいさつといたします。本当にありがとうございました。